

メカニックス・インスティテュート運動と英国公共図書館法
Mechanics' Institutes Movement in the 19th Century
England—Influences to the Public Libraries Act (1850)

常 盤 繁
Shigeru Tokiwa

Résumé

In this paper, the influences of the Mechanics' Institutes movement in the 19th century England to the Public Libraries Act of 1850 are discussed.

A simple definition of an early Mechanics' Institute would be an association of skilled workers to provide cheap instruction of scientific principles which exist behind their trades, by means of lectures, classes, and a library. The first Mechanics' Institute was established in Glasgow in 1823 and was followed in many places all over the nation.

The Select Committee on Public Libraries which was appointed by William Ewart in 1849 derived many evidences about the state of Mechanics' Institutes mainly from three witnesses, Dawson, Smiles and Langley and proved existence of popular demands for reading and libraries. But they also revealed serious defects of the Mechanics' Institutes, such as limited accessibility owing to the subscription imposed on members, fluctuating nature of financial resources, and lack of any permanent means of supporting libraries. On the other hand, free public libraries could be free from such deficiencies and the Committee emphasized many advantages of rate-supported libraries.

This paper will make it clear these problems of the Mechanics' Institutes movement by examining Minutes of Evidence of the Committee along with social backgrounds of the time. The most important backgrounds are the Industrial Revolution and popular educational movement of middle-class radicals.

Though educational functions of Mechanics' Institutes were taken over by local governments in the latter half of the century, this paper also shows that the transition to public libraries did not always proceed easily.

- I. 序
- II. 公共図書館特別委員会と M. I.
- III. M. I. 運動の性格
 - A. M. I. 会員の階層と性格
 - B. 急進派と大衆教育運動
 - C. 図書館
- IV. 公共図書館と M. I. ——世紀後半の問題
- V. 結 語

I. 序

メカニックス・インスティテュート (Mechanics' Institutes, 以下 M. I. と略記する) 運動は、グラスゴーのアンダーソン・インスティテューション (Anderson's Institution) で 1800年、パークベック (Birkbeck, G.) が開設したメカニックス・クラスに起源をもつといわれ、このクラスが 1823年、M. I. として独立したのを皮切りに、同年末、ロンドン M. I. が創設され、以後、急速に全国に普及したのである。M. I. とは、加藤鉦治氏の表現をかりれば、“講座、学習クラス、図書館(室)、博物館(室)、実験器具装置、実用模型などを付備開設し、もって熟練職工層を主体とする産業市民層に、徒弟制度下での技能の経験的学習を補完して、技術の背後にある科学的な原理を教授しようとした教育機関¹⁾”である。この教育内容と会員対象は、その後、変化するが²⁾、講義 (lecture)、学習クラス、図書館からなる M. I. の体制はほとんど変わらず、19世紀中に全国的運動に発展した。³⁾

本稿は、この M. I. 運動と 1850年の公共図書館法およびその後の公共図書館との関係について考察することを目的としている。

M. I. 運動が公共図書館法成立⁴⁾の背景として重要な意味をもっていることは、その前年 (1849) に、M. I. がユアート (Ewart, William) の要求で下院に設置された公共図書館特別委員会 (Select Committee on Public Libraries) の重要な調査対象になったことによって明らかである。⁵⁾ 同委員会の報告書⁶⁾では、M. I. は、コーヒー・ハウスと並んで、すでに英国民衆の間に図書館を形成し利用する自主的活動が存在し、公共図書館設置の正当性を示す証拠としてとりあげられているだけであるが、証言録には当時の M. I. の実態についての貴重な報告が記録されている。それによって、委員会

が M. I. 運動をどのように把握していたか、また公共図書館の必要性をどのようにしてそこから見出したかを知ることができる。本稿では、この委員会証言録と当時の下院議事録を基本的資料とし、それをこれまでの先行研究で補いつつ、先にかかげた課題を考察する。

M. I. 運動の歴史については、すでに詳細な研究が出ており、わが国でも様々な角度から研究紹介されているので、ここでは本稿に関連ある局面、特に世紀中葉の様相を中心にとりあげる。⁷⁾

II. 公共図書館特別委員会と M. I.

公共図書館特別委員会の報告書には、すでに触れたこと以外に、M. I. についての言及はない。これは一つには、この報告書を起草したユアートとエドワーズ (Edwards, Edward) が、公共図書館建設の必要性を強調するために、M. I. の私的な性格を重大な限界とみなしていたことによっていると思われる。証言録中のユアートとエドワーズの質疑応答は、そのことを示唆している。⁸⁾

Q. 303. (ユアート) 大都市で、図書館を提供する試みは行われましたか——(エドワーズ) M. I. によって非常に不完全な類の試みは行われてきました。私はここに、ランカンシャーとチェンシャーの都市に存在するいくつかの図書館のリストを持ってきましたが、これらの施設は財源が不安定で、永続性がないため、図書館はほんのわずかの期間しか存続せず、その結果、分散したり、売却されたりしています。

Q. 304. それらは、会員制図書館であるにすぎないということですか——それらは一定の年会費を払った人々にしか利用できない、会員制図書館にすぎません。

Q. 306. これらの図書館の所有する蔵書数はどのくらいですか——最大でリバプールの 15000冊です。これらはすべて非常に不適切な性格の内容で、また永続的な

維持手段を全く備えていないと申しあげたい。

この質疑応答からは、彼らが M. I. 運動に対して下した評価が得られる。M. I. の欠陥は、会員制という利用制限、財源の不安定、蔵書保管・維持手段の欠如である。そして、そこでは公費による無料公開の公共図書館が暗に對比されており、これらの欠陥はすべてその建設によって解決されるのである。特に、次の引用からも知られるように、彼らにとっては会員制という利用制限によって M. I. から締めだされた多くの労働者層こそが重大であった。

Q. 1969. (ユアート) 現在、働きかけることが特に望ましい人々は、これらの施設 (M. I.) が及んでいないより低い社会階層の人々ではありませんか——(スマイルズ Smiles, S.) はい。文化的団体とも宗教的団体とも何ら結びつきをもたない非常に大きな割合をしめる労働者階級の部分があります。彼らに対しては、社会はまったく面倒をみていませんし、彼らの方では文化的・精神的糧を備えていません。ですから、彼らのために、図書館、すなわち何らかの類の文化的糧を用意してやるのが非常に必要なのです。

Q. 2001. (ミルンズ Milnes, M.) 公共図書館を導入しさえすれば、あなたのいう M. I. に参加していない大きな階層に、読書習慣を身につけさせることができると思いますか——(スマイルズ) すでに述べた類の便宜、つまり、常時、特に夜間に開館する公共図書館を設けることによって読書の趣味は大変促進されるでしょう。人々に家族の所に持ち帰れる面白い本を与えれば、おそらく、外に出て遊興や怠惰に時間を費すよりも、家で本を読むでしょう。ですから、そうした図書館を設置することは、労働人口の道徳的、知的状態を改善するのに望ましいことであると思います。

公共図書館は、このように M. I. に参加できなかった一般労働者に大きな恩恵を与えるものと考えられたのである。しかも、1849 年当時、多くの M. I. の会員構成は、有名な *Self Help* を著わし、リーズ (Leeds) で M. I. 運動を指導していたスマイルズの証言に示されているように、設立当初とは大きく変化していた。彼は、“大都市の M. I. は一般的にいて、職工 (mechanics) のための施設ではない。それらは大部分、中産階級および相当に地位のある階層と、半分に満たない場合もあるが、小部分の労働者のものである” (“ヨークシャー連盟の 16000 人の会員のうち)、半数は、週給 1 ポンドから 30 シリングの賃金を得ている上層労働者階級に属していると

思われる。リーズでは、工場労働者は極めてわずかししか M. I. に参加していない。あるとしても例外である、”⁸⁾と述べている。彼はさらに、この原因を二つあげている。“会費は、1 ペニーから、2 ペンス、3 ペンス、4 ペンスと様々である。労働者にとっては週に 1 ペニー高いか低いかでは重大な差異がある。ハダスフィールドでは、会員からの会費だけでは学習クラスにかかる費用をまかないきれない。しかし運営者達はあえて週会費を 1 ペニー引き上げようとししない。なぜなら、会員がただちに深刻な規模に減少することを恐れるからである。” “労働者階級からの支持が得られないもう一つの理由は、彼らの時間は日中の大半を労働に占められ、帰宅が時刻おそくなることである。最近、発効した法律 (10 時間労働法、1847——引用者) は、彼らの自由時間を増加させたが、その結果、ある地域では労働者階級が M. I. を利用し、最近学習クラスを結成したといわれている。¹⁰⁾

この証言から、中産階級はともかく、M. I. に参加していた労働者は一般の労働者に比べて恵まれた条件のもとにいたと推察される。では、彼らはどのような労働者であったのだろうか。この点を次章で検討する。¹¹⁾

III. M. I. 運動の性格

A. M. I. 会員の階層と性格

M. I. 運動の 前走者は、文学・科学協会 (Literary and Scientific Society) と汎称され、18 世紀中葉以後、活発になったクラブ的な教育組織とそれらと密接な関連をもっていた会員制図書館 (Subscription Library) など、中産階級を主体とする施設であるということが出来る。¹²⁾ ケリーは、“M. I. は中産階級の文学・科学協会の下方への拡張とみなされうる、”¹³⁾と述べている。すなわち、M. I. 運動は、18 世紀においては中産階級を主体としていた、そうした教育・文化施設が、19 世紀に入ると共に、より下層の階級にも普及していった結果であると考えられるのである。しかも、18 世紀から 19 世紀初頭にかけて、労働者を対象とした協会や会員制図書館など M. I. の先駆的活動が、少数ではあるが、すでにみられる。¹⁴⁾ それらの中には労働者自身が形成したものもいくつかみられるが、多くは中産階級に属する人士の提唱によって開かれたものである。しかし、いずれにしても少数とはいえ、労働者の意欲があったことは疑い得ない。M. I. 運動が 19 世紀の 20 年代以後、突然、必要とされ発生したものではなく、すでに前世紀からその基盤が用意されつつあったことを知り得よう。そして、そうした

労働者の意欲は、いわゆる自助 (self help) の伝統となった。スティーブンソン (Stephenson, G.) やワット (Watt, J.) など初期工業時代の英雄たち、コベット (Cobbet, W.) やラヴェット (Lovett, W.) ヘザリントン (Hetherington, H.), クーパー (Cooper, T.) など労働運動の指導者たちは、この伝統の中から生み出されたのである。またそれは、19世紀には、小規模ではあるが多数の相互教育協会 (mutual improvement society) を生み出した。

しかしながら、この伝統はあくまで、少数者の伝統 (minority tradition) であり、“自らを教育するに、言葉の完全な意味でほとんどどんな代価をも支払う用意のある例外的な熟練労働者 (artizans) の伝統”¹⁵⁾ であった。しかし M. I. 運動は会員たる労働者層を中心にみれば、この伝統の延長上にあったと考えられる。次に検討するように初期の M. I. 会員の主体は熟練労働者であったし、相互教育協会とその類似施設 (ブック・クラブ、討論クラブ、政治クラブなど) と M. I. とは並存し、しかも相互教育協会から M. I. に発展したり、M. I. の一部の会員が離反して相互教育協会や会員制図書館を結成したりするなどの例があり、また、小規模な M. I. は、相互教育協会と区別がつけがたいことが多かったのであって、事実上、それらの構成員はほとんど同じ階層に属していたものと考えられる。ただ、M. I. には中産階級の援助と指導とがあり、より組織的、体系的な教育方法が行えたという点で、相互教育協会とは異なるのである。¹⁶⁾

さて、それではこのような労働者層は、労働者階級全体の中でどのような部分であっただろうか。安川悦子氏は、当時の労働者階級は多様な構成部分からなり、しかも“産業革命による技術変革のまっただなかで、労働組織はきわめて流動的になっており、労働者の階層分化も激しかった”のであって、労働者階級という言葉によって均質的な階級を想像することは不可能であると述べている。同氏に従って、労働者を熟練の度合によって分類すると、第1に熟練労働者、(mechanics' and artizans)、第2に製造業で働く半熟練労働者 (operative class)、第3に非熟練労働者 (labourer)、第4に完全に貧困化した貧民や浮浪人 (labouring poor) の層があった。しかし、“こうした新しい階層分化が行われると同時に、資本主義生産のもとでの賃労働として、労働全体が水平化する傾向もあった。賃労働として横に水平化される方向と、熟練 (技術) の程度に応じた上から下への階層分

化の方向とは同時に働き、産業革命期の労働者の思想や運動をみていく場合、この縦と横の座標軸の上で考える必要がある。¹⁷⁾

安川悦子氏はこのような前提にたって『メカニックス・マガジン』(Vol. 1., 1823-24)の読者層の分析を行っているが、これはロンドン M. I. の初期の会員について非常に鮮明な具体像を与えてくれる。というのも、ロバートソン (Robertson, J. C.) とホジスキン (Hodgskin, T.) が編集したこの雑誌は、最初にロンドン M. I. 設立を提唱し、のち機関誌となったものであり、その読者層は創立当時のロンドン M. I. の会員とほぼ同じであると考えられるからである。本稿にとって同氏の分析は極めて示唆的であるので、以下、簡単に紹介しておきたい。¹⁸⁾

まず、『メカニックス・マガジン』の読者は、上述の階層序列からいえば、“第1の熟練労働者層を中心とした(場合によっては、半熟練労働者をも含めた)極めて上層の労働者たちであった。”具体的には、その主流は機械製作の熟練職人であった。

“19世紀の20年代といえは、前世紀後半よりはじまる繊維産業の作業機の発明や改良と、動力機=蒸気機関の改良とが一応定着し、これらの改良や発明が連鎖的に各種の産業にひろがりはじめていた時であり、同時に、“はじめはマニユファクチュアで生産されていた機械がそれ自体、新しい機械によって生産されるというまさに資本主義生産の技術的基礎が確立されようとしていた時”であった。そして、北部工業地帯では、蒸気機関の紡績織布部門の作業機への応用に関心が向けられていたのに対し、ロンドンでは、蒸気機関の製作の基本的過程である機械製作の諸問題に関心が向けられ、機械化の遅れていたこの部門では、精密な部分品を作るためにマニユファクチュアの熟練職人を労働力の土台としていた。従って、そこでは錠前師や時計工、水車大工、車大工などが新しい機械製作の担い手になろうとしていた。¹⁹⁾そこでは、きわめて手工的な旋盤が用いられており、1830年代以降、本格的に完成される工作機械はまだ使われておらず、従ってそれを扱う上で、まだ手の熟練的要素がきわめて大きかったのである。他方、“機械製作が複雑になってくると、部分的な実用知識だけでなく、広い科学的・基礎的な知識が必要になり、”実際の生産技術を徒弟制度における親方からの秘伝としてではなく、一応客観化して把握しようと努力されていた。ここに、熟練職人に対する科学教育の必要性が生じてきたのだといえよ

う。²⁰⁾ こうした労働者層が『メカニクス・マガジン』読者の主流であった。

これに加えて、安川氏は次の二つのタイプの労働者もやはり『メカニクス・マガジン』の読者層とみなすことができるとしてとりあげている。一つはロンドンのスピタルフィールズ地区の絹織物業において、それまで労働者保護の機能をはたしていた賃金規制法を廃止しようとする動き（結果的に自由労働と機械導入を意味する）に対する熟練職人の反対運動を、“新しい科学・技術の獲得によって新しい生産力を自分たちの手中にみずからおさめること”こそ、とるべき道であると説いたホジスキンの掌握していた、没落しつつある熟練労働者であった。もう一つは、“資本主義的経済体制を客観的なものとして承認し、しかも新しい技術や機械の採用を、利潤—相対的剰余価値を増大させるものだとして奨励”している“すでに資本家へ上昇転化しているか、あるいはしつつある親方層と上に並んだ労働者たち”である。以上の三つのタイプの労働者層が『メカニクス・マガジン』を支えた主要な読者だったのである。

ところで、こうして科学・技術の知識を志向する労働者層は、“機械に排除されて、生産力の増大を利益と感じとることができなかった没落熟練職人（主として織布部門に従事していた）とは反対に”、“新技術を手がかりに、新しい産業革命社会にうまく対応しようとする人たちがあった。かれらは、技術を手がかりとして、新しい資本主義体制をささえ、さらにその体制の上部へよじのぼりうるという自信に満ちあふれていたのである。こうした自信がうち破られ、幻想が幻想であることをしるようになるのは、まだこの段階ではあらわれていない”のである。

以上、安川氏の分析によれば、ロンドン、M. I. の会員とみなされうる『メカニクス・マガジン』の読者層は、他の労働者層とはきわだって異なる意識構造をもった労働者であったことがわかるであろう。すなわち、“きわめて独立小生産者のな労働モラルをみにつけ、まさに機械製作業が資本主義生産の中核として本格的に成立してくるその最初の段階において、古い熟練や知識を新しい科学・技術にとりかえようと積極的に志向した”保守的、中産階級的な労働者だったのである。このような労働者像は、地域によって職種や会員構成の比率に相異はあろうが、他の地域の（特に工業都市）M. I. 会員についても基本的なものであったと考えられよう。M. I. は、もともとこのような労働者層を対象としていたので

あり、先にスマイルズが証言した一部の上層労働者階級とは、このような人々であった。

ところが、多くの M. I. では、そうした熟練労働者ですら次第に減少し、科学教育もただちに失敗した。それは、どのような原因によるものであったろうか。以下、この点について若干、考察しておこう。

まず第1に、産業革命の進展と共に熟練労働者が次第に不用になっていったことが考えられる。安川氏は、“技術の変革＝機械の採用に伴う旧型熟練職人層の没落は産業革命の一つの必然的結果”であって、上に述べた熟練労働者も、結局は“大半が賃労働の側に組み入れられてしまった”と述べ、倉内史郎氏は、資本主義生産体制は、“比較的少数の専門技術者と、‘あたまのいらない’大量の労働者という分業形態に応じた教育制度”を必要とし、M. I. 運動は、“資本主義の生産体制にこたえる技術体系の中で、改めて編成し直さなければならない運命をもっていた、”と述べている。²¹⁾

第2に、化学や数学、物理学など純粋科学は進歩していたが、機械工業を除いて、それらの産業への応用の研究はさほど進んでおらず、また応用分野も限られていた。19世紀のかんりの時期まで、多くの産業では純粋に経験的知識と技能に頼っていたのであって、大部分の熟練労働者にとって科学分野の知識が直接、仕事に役立つことは少かったのである。公共図書館特別委員会で、ラングリー (Langley, I. B.) は、“彼ら（職工）の多くは、彼らの方が他の誰よりも蒸気機関について多くのことを知っていると思っている。それは力織機についても同じである。”²²⁾と証言している。

第3に、M. I. 創設者たちは労働者階級の教育的、生活的条件の実態について認識が不足していた。まず、彼らは労働者の教育的背景をあまりに高く見積りすぎていた。労働者階級はなお、初等教育が不備であり、高度の科学原理についての講義を理解するほどの予備知識をもっていなかったのである。従って、講義よりも、まず3Rsを教えるクラス授業の方が必要であったし、事実この方が受講者の数は多かった。さらに、“知識への情熱はどの階級にあっても決して広くは浸透していないし、ましてそれを満足させるために、犠牲が伴わなければならない場合は、その浸透度はなお一層せめられるというのが冷厳な事実”²³⁾であった。M. I. 運動の指導者ブルーアム (Brougham, H.) が、次のように語る時、先に述べた少数者の伝統である自助を多数の者に向かって要求していたのだということができよう。“人々は、

自分たちじしんの教育という仕事をなしとげるとき、自分たちじしんが立派な教育主体でなければならない。もしかれらが知識の有用性を痛感して、それを獲得するために若干犠牲をはらう決心をしないならば、この大目的達成の合理的見通しは論理上ありえない。²⁴⁾ 以上に加えて、スマイルズが指摘していたように、長時間労働と低賃金は会員層を限定したし、多くの労働者は労働の疲れの後、知識獲得より娯楽と休息を求めたと考えた方が自然であろう。

こうして M. I. はその教育内容を一般的なものにし、講義は歴史、文学、音楽、美術などに関するものが増加し、他方、コンサートやパーティ、展覧会、旅行など娯楽、リクリエーション活動が導入されるようになった。同時に、書記 (clerk) を中心とした下層中産階級が大量に流入し、会員は極めて雑多になった。²⁵⁾ ハリソンによれば、「職工に対する科学教育という狭い方針からの退却は、1830年以前にすでに始まっており、1840年までには、M. I. は一般文化と健全なリクリエーション活動のためのセンターであるという考え方が確立していた²⁶⁾のである。

次節では、この教育内容の変化を急進派の教育運動との関連で考察する。

B. 急進派と大衆教育運動

タイルコート (Tylecote, M.) は、M. I. 運動は、「労働者階級の現実に存在する欲求や着想と関連こそもっていたが、一つの運動としては、彼らによって創始されたものではないという点を強調する必要がある。²⁷⁾と述べているが、実際、M. I. 運動を主導したのは労働者階級ではなく、中産階級であった。そして、ウェブ (Webb, R. K.) が、「20年代の M. I. は、ミルが意図した類の高等教育 (advanced education) を組織する努力であった、²⁸⁾と述べているように、M. I. 運動は、ベンサムとミルによる功利主義的教育観とそれを奉じたウィッグ左派のいわゆるブルジョア急進派の影響下におかれていた²⁹⁾しかし、その教育観は、高等教育 (科学・技術) のみならず、社会改革運動の一環として、初等、道徳、政治教育を含む大衆教育運動をめざしたものであって、急進派は議会内外で、活発にその運動をくりひろげていたのである。³⁰⁾M. I. は科学教育に失敗すると、次第にこうした面で重要視されるようになった。

ところで、彼らの大衆教育運動は、現実的問題としては、社会問題の対策に向けられていた。人口の密集した都市における労働者階級のモラルの低下や不健全な娯

楽、不衛生、暴動などの問題は、国家存亡の危機として認識され、教育と健全な娯楽の必要性を増大させた。そこで、彼らは M. I. をこうした社会問題解決の手段と考えたのである。

1841年、下院で行われた M. I. 国庫助成に関する審議³¹⁾は、このことをよく示している。国庫助成を動議したジロン (Gillon, W. D.) は、M. I. は単に職工の仕事に役立つとか、生産力を増大させるとかのためにあるのではなく、「より大きくより良い目的は、労働者に余暇時間を健全で教育的な営みができるようなものを提供することである、³²⁾と述べている。彼はまた、M. I. を立身出世の手段と考える風潮に対し、リード (Reid, Hugo) の次のような言葉を引用している。「もし、すべての人間が同等に教育されたならば、生れつきの才能以外に、特別の恩典を与えたり、他人と差をつけたりするものは何もなくなってしまうであろう。しかし、すべての人々が富を得、高位にひきあげられるということはあるえないが、知識によってすべての人が喜びの源を広げ、かくてどのような地位にあらうと自らをより賢く、より幸福にし、より善良にするのである。³³⁾

ジロンの動議に関して発言した6人の議員全員がこの点を強く支持している。例えば、ピールは、「労働者階級に有益な知識と理性的娯楽の手段を提供することは、良き秩序と、職工の信用、また大都市の道徳に対してきわめて重要である。³⁴⁾と述べ、ユアートは、「(デザイン学校にかかる)費用は、商業的観点においてのみならず、人々の状態の改善において十分に償われる。……デザイン学校、図書館、M. I. を提供することによって、英国の人々を向上させるこれらの方法は、非常に良い効果をあげるであろう、³⁵⁾と述べている。この審議では、M. I. とデザイン学校、美術館、展覧会、運動場などが、社会問題対策として、ほとんど同じ次元で論議されているのである。

M. I. では、同時に政治経済学 (political economy) の教育が最初から計画されていた。これは、ブルーアムの「実際の観察」(1825)の中に、政治教育の必要性が説かれていることによって明らかであるが、³⁶⁾ 1837年、ベイカー (Baker, C.) は、政治経済学に関して次のように述べている。「労働人口が密集している都市——そこではストライキや労働組合、団結などが、商人、製造業者、及び職人に破壊的作用を及ぼしてきた——においては、国富と産業に影響を与える諸原理が完全に理解されることがきわめて重要である。³⁷⁾

すなわち、労働運動や社会主義思想の普及に伴って、いわゆる古典派経済学教育³⁸⁾が必要となってきたのである。ウェーブは、ブルーアム、ナイト (Knight, C.)、マーティノー (Martineau, H.) らが行なった中産階級政治教育のための出版活動を論じて、それは、「中産階級のより進歩的なメンバーは、(労働者の過激な思想・行動の)洪水をもはや止められないということを悟った。彼らはそれに引き具をつけ、それを彼ら自身の道に導き入れようとした、³⁸⁾と述べている。もっとも、労働者の政治意識を強めるとする強い反対のために、「政治的・宗教的討論は、一般に、M. I. の規則によって³⁹⁾排除されていたが、古典派経済学だけは例外とされたのである。⁴⁰⁾

また、多くの M. I. の図書館では、当初、政治・宗教に関する書物は厳格に排除されていたが、熟練労働者の「最も強い関心は政治的問題⁴¹⁾であったし、チャーティストや社会主義者が M. I. と類似の施設を設けて(ここでは政治的書物が自由に閲覧できた)、労働者を引きつけるようになると、⁴²⁾もはやそうした規制をとってはいられなくなった。そして、1840年頃から多くの M. I. で新聞閲覧室が設けられるようになった。⁴³⁾ドーソンは、1849年の委員会で、マンチェスターの場合について、ほとんどすべての M. I. で新聞や政治に関する書物を受け入れていると述べている。そして、「両方の(政治的立場の)主要な新聞をおいてない M. I. を知らない、⁴⁴⁾として、政治に関する書物の受入れの安全性を強調している。

しかし、当時のすべての M. I. がこのようであったわけではない。ドーソンもマンチェスター以外では、規則によって排除している所が多く、重大な欠陥であるとし、ラングリーは政治・宗教書のみならず歴史書まで排除している所があると述べている。⁴⁵⁾そして、ドーソンはそうにして政治・宗教書を排除したために、労働者が M. I. を脱退して9人で自分たちだけの小さな会員制図書館を設けるに至った例をあげ、ラングリーは、炭坑地帯のいくつかの地域で、M. I. が設立された時、「政治・宗教書を排除した結果、坑夫たちはそれらに加わらなかった、⁴⁶⁾と証言している。

いずれにしろ、こうした上の階級による統制を労働者が嫌がったことは事実であった。M. I. が多くの労働者層をつかみえなかった理由の一つも、この点にあったのである。(see Altick, *op. cit.*, p. 192-3)

C. 図 書 館

以上、本章では会員構成、科学教育、政治教育について考察し、それらがいずれも創立当初の期待に反して挫折したこと、その結果世紀中葉まで M. I. は、比較的上層の雑多な会員からなる一般教養と娯楽のためのセンターと化する傾向が強まっていたことを指摘した。最後に本節では、当時の M. I. の図書館について検討する。

ところで、講義やクラス授業が上述の理由から多く失敗したのに対し、図書館はきわめて重要視されていた。スマイルズは、「図書館は M. I. のいわば結合の絆 (a bond of union) である。つまり施設の統一を保つためには図書館をおくことが必要である、⁴⁷⁾と述べ、ラングリーは「もし図書館がなければ、M. I. は消滅するであろう。それらは図書館が与える魅力のゆえに存在するのである、⁴⁸⁾と述べている。これは一つには、当時労働者が自由に利用できる図書館、特に夜間開館される図書館は M. I. の他にほとんどなかったことにもよっていた。⁴⁹⁾

しかし、エドワーズも指摘していたように多くの問題もかかえていたのである。

まず第1に、書物の大部分を寄贈に頼ったことである。ドーソンは、「多くの本は人々の書棚から寄せられた寄贈本で全く読まれたことのないものであり、また様々の古い雑誌とかで、1000冊のうちおそらく400~500冊しか有益なものはないであろう。他の多くは年刊と古い宗教雑誌で、それらは決して書架からとりだされたことがない⁵⁰⁾とし、スマイルズは、M. I. の多くの書物は非常に魅力がない。例えば寄贈による多くの書物は、今日誰も読もうなどと考えない書物である。大部分は退屈で重苦しい本である⁵¹⁾と証言している。このような状況は、M. I. の資金不足から起こっており、講師の給料や、建物の建築費あるいは賃借料に資金の大部分が費消されて、新しい本を買う余裕がなかったのである。⁵²⁾そのため、最初、本はすり切れるまで読まれるが、2, 3年たつと大半が読まれてしまい貸出しが急激に減少するのが常であった。スマイルズは、従って新しく公共図書館を設置するならば、絶えず新しい本を提供するような措置が必要であると証言している。⁵³⁾

もう一つは、小説の問題であった。当初、ほとんどの図書館の蔵書は自然科学書に偏り、政治宗教書のみならず小説類も排除されていた。しかし、世紀中葉には、「図書館は最も利用されているが、小説がその大部分をしめている。比較的小規模の M. I. では、要求は主として

小説である。ガーフォース (Garforth) M. I. やその他いくつかの M. I. のように、小説を排除する規定が採用されてきた所もあるが、そうした M. I. では他の多くと比べて本の貸出しは非常に少ない⁵⁶⁾というのが実態であった。そして、産業地帯でも科学書の需要は乏しく、⁵⁵⁾ 小説がもっとも読まれているという点で証言は一致している。⁵⁶⁾ こうした傾向は、M. I. の運営者や後援者を嘆かせ、外部からも批判があったが、⁵⁷⁾ 多くの M. I. では、会員を集めるために、乏しい図書購入費の大部分を小説類に費さざるをえなかったのである。

さて、こうして公共図書館特別委員会は、第Ⅱ章で述べたように、大衆の教育・文化施設として M. I. が不適切であると結論したのである。公共図書館は、M. I. の限界を克服し、そこに芽ばえがみられる大衆の知的活動をより広汎に拡張することができると考えられた。無論、無料公開であるからといって M. I. で生じた問題が解決されるわけではなかった。労働者の長時間労働と初等教育不備などの問題が残されている。しかし、労働時間短縮運動と公教育運動は、国民的運動として、遅々としていたが一步一步進められていたし、急進派はそうした社会政策にも熱心にとりこんでいた。⁵⁸⁾ 公共図書館法は、ある意味では時期尚早の観がなきにしもあらずであったが、ユアート等はそうした社会政策の将来の成果に期待していたのである。むしろ、公共図書館法は広く社会政策の一環であったともいえるのである。

ともあれ、世紀後半に公共図書館法による地方自治体が運営する公共図書館が遅々としてはいたが建設されるようになると、M. I. の図書館機能はそれに肩代わりされていくことになった。⁵⁹⁾ その際、次章でみるように、M. I. はこの新しい公共図書館の発展の障害となることもあったが、他方、建物や蔵書が市に移管されたり、当座の保管所として公共図書館に貸し与えられたりする例もみられた。例えば、グリーンウッド (Greenwood, T.) は 1894 年の著書で、“ホワイトハーベン、ノース・アンド・サウスシールズ、パンスリイ、カーライル、その他いくつかの地域では、以前 M. I. のものであった建物に公共図書館を置いている。ノッティンガムでは、アーティザンズ・ライブラリ (Artizans' Library) を公共図書館が引き継ぎ、図書館がもっと大きな建物に移されるまで、M. I. の建物を使用していた、”⁶⁰⁾ と述べている。こうした移譲は初期の公共図書館の財源難を救い、また 1850 年法は税收からの書物購入を禁じていたから、蔵書の内容はともかく大きな恩恵となったのである。

また、M. I. は図書館運営法の面でも公共図書館に遺産を残した。有用知識普及協会が 1839 年に発行したマニュアル (*A Manual for Mechanics' Institutes*) は、公共図書館にとってもきわめて示唆的な運営上の方針を提案している。それは、推選図書リストや図書室の規則案、当時の図書館施設実態調査結果などをのせ、次のような点を指摘している。① 読書案内の必要性 ② 図書を体系的に配列し、注釈つきの目録を用意すること ③ 地方産業に関係ある技術書のコレクションを作ること ④ 会員の読書傾向を調査して、図書選択のガイドとして役立て、読者への助言サービスの基礎資料とすること ⑤ 郷土コレクションをつくること ⑥ 市税による公共図書館設立の提案。⁶¹⁾

リー (Lea, J. T.) は、“こうした提案は、ほんのわずかの M. I. で実施されただけであるが、活発な一群の M. I. 図書館員が存在した証拠があり、彼らは、一般的な図書館施設の諸問題ととりこんでいたから、方針をたてたり、経験にもとづく諸方法をうちだすことができた。彼らは、こうして初期の公共館図書館員を大いに助けたにちがいない”⁶²⁾ と述べている。これがどの程度のものであったかは明らかでないが、ともかくもそうして M. I. での実践から得られた諸経験や改善案などが有用であったことは疑いえない。大衆を主に対象とした図書館は、M. I. 以外に組織的なものはなかったのである。

Ⅳ. 公共図書館と M. I. ——世紀後半の問題

M. I. が公的機関にその教育的機能を肩代わりされていった事実は、大陸諸国のように中央集権的国家制度がとられていた国々と比べて、イギリス的な特殊性をあらわしている。自由主義と地方分権的制度がとられていたイギリスでは、公的制度が確立される前に、まず民間の活発な運動がみられ、これ自体は高く評価されるべきであろうが、同時に公的制度の確立を遅らせる原因にもなった。公教育運動の場合は、有名であるが、公共図書館の場合もまた同じ問題が生じたのである。

1850年の議会にユアートによって公共図書館法案が提出された時、それに反対する議員から次のような意見が出された。“ボランティアと自活の原理こそ、そうした施設 (図書館) の命であり真髄であり、有益なものとする源泉であると私は信ずる。それに代えて、この種の施設に公的運営と強制課税の原理を適用するということは、その前に議会の充分な検討を要することと思う。私は、

彼ら（法案賛成者）がしようとしていることが、自発的に参加していない人々の間に知識への愛を増加させるかどうか疑わしいと思う。また、強制課税の原理が導入されたとしたん、現在、人々の間に存在する、自主自活によって知識を求めようとする欲求に重大な抑制が加えられることを最も憂慮している。⁶³⁾これは具体的には M. I. とその類似施設をさしているが、このような考え方は後々まで根強く残ったのである。グリーンウッドは、1894年の時点で次のように述べている。“むりとはいいいきれないが、多くの地方に、公共図書館が、M. I. あるいはその類似施設を破壊するだろうという恐れが存在する。これらの施設について何か知っている人は皆、これらが過去において賞賛すべき仕事をしてきたことを喜んで認めるであろう。しかし、これらが今日の必要性に適うものであるかどうかはきわめて疑わしい。それらは専有的施設 (proprietary institutions) であるため、その性格があまりに排他的である。また一般の労働者にはあまりに費用がかかりすぎる。(中略) 多くの M. I. の図書館は貧弱をきわめている。新しい書物のないのが目立ち、資金不足のため衰え、徐々に死に絶えようとしているもののみられる都市が少くない。それらは、公的統制に服さず、あまりにも徒党の管理下におかれている限りにおいて、公共図書館を健全で活発に保っている一つの決定的な原理を欠いているのである。”⁶⁴⁾ここからは、当時、なおかなり M. I. が残存していたことを知り得るが、彼は特に、ヨークシャー M. I. 連盟の巡回図書館 (itinerating libraries) の活動を高く評価している。⁶⁵⁾ このような事実に見れば、マリソン (Murison, W. J.) の次のような見解もあながち極論とはいいいきれない側面を含んでいるのである。すなわち、彼は“(ヨークシャー) 連盟はこの種のサービスを維持することによって、代わりの図書館施設を必要としなかったことを暗示していた。”そして“M. I. の図書館の内容がよければよいほど、新しい市立公共図書館との競争は激しかった。”かくて、“M. I. は公共図書館の設立に何ら直接の助力を与えなかったし、それに好意的な議論も与えなかった”としているのである。⁶⁶⁾

M. I. 運動は、成功した場合、このような側面も合わせもっていたのである。しかし、19世紀末までにはほとんどが公的機関にとってかわられたことはいうまでもない。

V. 結 語

M. I. の運営形態は、その後の公共図書館においても長く、拡張活動 (extension activities) の形で名残をとどめている。これは、公共図書館が公開講義を催したり、科学や美術のクラスを設けたり、地域のクラブ活動・文化活動を援助したりするものである。⁶⁷⁾ 他方、リーは、M. I. 後期の特徴である雑多な会員構成および一般的教育内容、娯楽・リクリエーション活動に注目して、M. I. はコミュニティ・センター (公民館) として、当時の社会生活の向上に資したとして評価し、20世紀初期からいくつもの地方自治体が開始したコミュニティ・センター (美術・文芸などのクラスとリクリエーションを並行して行う) と対比している。⁶⁸⁾ 公的機関が運営している点でこれらは M. I. と決定的な相異があるが、今日、このような形で M. I. の活動形態を見直すことも可能であろう。

- 1) 加藤鉦治. “英国 mechanics' institute の起源——18世紀 Glasgow における Anti-Toga Class と Anderson's Institution,” 名古屋大学教育学部紀要 (教育学科), vol. 20, 1973, p. 185.
- 2) M. I. は 1829~32 年の経済恐慌やその他の理由で会員が減少し、その解決策として教育内容をひろげてより広い階層を対象としたが、結果的には、熟練労働者が減り、書記や事務員層が増大したのである。
- 3) ケリーによれば、1823年末、Great Britain で 6 校、24年には新しく 14 校、25年には約 70 校が生まれた。その後、ロンドンと北部工業地帯を中心に増加し、26年には M. I. と類似施設が 109、31年に 107、41年に 107、41年に 305、51に 698 校が存在した。会員数は 1851 年で総計 110,000 (E. 97000, W. 3000, S. 10000) 人となった。しかし会員数は 13 人から 1000 人以上という幅があり、1851 年でみると 200 人以下が 551 校、220—500 人は 112 校、500 人以上は 35 校となっている。蔵書数は全体で 655,000 冊、平均 1000 冊、最大がリバプールの 15,000 冊、会員 1 人あたりの貸出数は年に、10~40 冊 (いずれも 1851 年) とされている。

Kelly, Thomas, *George Birkbeck; Pioneer of Adult Education*. Liverpool, Liverpool University Press, 1957. p. 265-7.

Kelly, Thomas. *Early public libraries; a history of public libraries in Great Britain before 1850*. London, Library Association, 1966. p. 231.

- 4) 常盤繁. “ユアート法と議会,” 日本図書館学会年報, vol. 22, 1976, p. 1-9. 参照.

- 5) リード・スミスは当時、M. I. と大英博物館以外に大衆文化施設のモデルはなかったと述べている。
Reid-Smith, E. R., *Parliament and popular culture in the early nineteenth century; some strands in the history of libraries and adult education*. Oldham, Research in Librarianship, 1969. p. 14.
- 6) House of Commons. *Report from the Select Committee on Public Libraries; together with the Proceedings of the Committee, minutes of evidence, and appendix*, 1849. (Reprint: Irish University Press series of British parliamentary papers; Education—public libraries, 1. Shannon, Irish University Press, 1968.) (以下 1849 Report と略記する。
- 7) 上記の文献のほか、本稿執筆に際して参考にしたものを列挙しておく。
①Tylecote, Mabel. *The mechanics' institutes of Lancashire and York shire before 1851*. Manchester, Manchester University Press, 1957. x, 346 p.
②Lea, J. T. *The History and Development of the mechanics institutions*. Oldham, Research in Librarianship, 1968. 13 p.
③Hudson, I. W. *The history of adult education*. London, 1851. (Reprint: London, Woburn Press, 1969.) xvi, 238 p.
④Baker, Charles. *Mechanics' institutions and libraries*. Central Society of Education, First publication of 1837. (Reprint: London, Woburn Press, 1968, p. 214-255.)
⑤Munford, W. A. *George Birkbeck and mechanics' institutes*. Oldman, C. B., Munford, W. A., and Nowell-Smith, S. *English libraries 1800-1850*. London, University College London, 1958, p. 33-58.
⑥Edmondson, Joan. *Mechanics' institutes and public libraries*. Munford, W. A. *Penny rate*. London, Library Association 1951, p. 132-146.
⑦Altick, R. D. *The English common reader; a social history of the mass reading public 1800-1900*. Chicago, University of Chicago Press, 1957. ix, 430 p.
⑧Greenwood, Thomas. *Public libraries; a history of the movement and a manual for the organization and management of rate-supported libraries*. 4th ed. 1894 (Reprint: College of Librarianship Wales, 1971,) xxxi 598 p.
⑨Harrison, J. F. C. *Learning and living 1789-1960; a study in the history of the English adult education movement*. London, Routledge and Kegan Paul, 1961. p. 3-144.
Simon, Brian. *Studies in the history of education 1780-1870*. London, Lawrence and Wishart, 1960. 369 p.
⑩Hammond, J. L. and, Hammond, Barbara, *The Age of the Chartists 1832-1854; a study of discontent*. 1930. New York, A. M. Kelley, 1967. (reprint). ix, 380 p.
⑪Brougham, Henry, イギリス民衆教育論. [*Practical observations upon the education of (the People, addressed to the working classes and their employers*] 浜林正夫, 安川悦子共訳, 東京, 明治図書, 1970. p. 115-161.
⑫加藤証治. "英国 Mechanics' institute の起源 (2) —Glasgow Mechanics' Class · Edinburgh School of Arts · Glasgow Mechanic' Institution" **名古屋大学教育学部紀要** (教育学科), vol. 21, 1974, p. 157-68.
⑬加藤証治. "Thomas Hodgskin 教育論考——『London Mechanics' Institution 設立提唱』の思想," **名古屋大学大学院教育学研究科教育論叢**, no. 18, 1974, p. 39-61.
⑭加藤証治. "London Mechanics' Institution 成立の経緯," **日本の教育史学**, 第18集, 1975, p. 74-92.
⑮加藤証治. "英国 Mechanics' institutes 運動と technical college の成立," **日本社会教育学会紀要**, no. 11, 1975, p. 64-75.
⑯安藤悦子. "イギリスにおける労働者教育運動の成立——職工学校運動とその思想的背景," **歴史学研究**, no. 272, 1963, p. 1-13.
⑰佐伯正一. 中等教育の発展. 東京高陵社書店, 1973. p. 148-161.
⑱大沢 勝. "英国における職工教習所運動とその意義——運動の評価に関するノート (1)" **日本福祉大学研究紀要**, No. 8, 1964, p. 22-45.
⑲倉内史郎. 機械工講習所運動の結末——イギリス初期の成人教育運動における階級の問題について. 日本社会教育学会編. 社会教育と階層. 1956 (日本の社会教育 2) p. 49-60.
⑳岸本幸次郎. 英国初期成人教育運動の性格とその要因, **広島大学教育学部紀要**, 第1部, no. 9, 1961, p. 73-89.
㉑森 耕一. 図書館の話. 至誠堂, 1966.
㉒森 耕一. パークベックとグラスゴー職工学級," **図書館界**, vol. 19, 1968, p. 201-7.
㉓森 耕一. "職工学校の成立とその背景," **図書館界**, vol. 20, 1969, p. 171-9.
㉔森 耕一. "ロンドン職工学校の創立——とくに財政的基盤について," **図書館学**, no. 19, 1971, p. 31-4.
㉕清水末寿. "Mechanics' institution——その背景と図書館," **図書館界**, vol. 21, 1970, p. 34-41.
㉖碓井正久. 社会教育. 東京, 第一法規, 1970. p. 29-41.
8) ケリーによれば, エドワーズとユアートとの質疑応答は, 前もって綿密に打合わせられていたものだと

いわれる。また、2人が起草したこの報告書は外国の図書館の優秀さを強調するあまり、M. I. のみならず英国の民間の図書館活動を正當に評価していないと述べている。

Kelly, *Early public libraries, op. cit.*, p. 185.

Kelly, *A history of public libraries in Great Britain 1845-1965*. London, Library Association, 1973. p. 11-14.

- 9) 1849 Report Q. 1956, 1981.
- 10) ただし、会員構成の変化は、上層労働者が減って中産階級が増えた結果なのであって、スマイルズのいう工場労働者は最初からわずかししか参加していない。
- 11) 会員制図書館については、Kelly, *Early public libraries, op. cit.* p. 115-151, 204-9, 文学・科学協会については次注の文献に詳しい。
- 12) Kelly, Thomas, *A history of adult education in Great Britain*, 2d. ed. Liverpool, Liverpool University Press, 1970., p. 116.
- 13) 労働者が自ら開いたものとして、Spitalfields Mathematical Society (1718), Oldham Mathematical Society. (1794), Manchester Mathematical Society (1718), Mechanical Institution (London, 1817). またイギリス最初の会員制図書館はスコットランドの坑夫が結成した、Leadhills Reading Society (1741) と Wanlockhead (1756) のものである。中産階級の提唱のもとに発 (1796), 足したものには、Birmingham Brotherly Society Glasgow Gas Workman's Library (1821), Liverpool Mechanics' and Apprentices' Library (1823), その他多数がある、労働者会員制図書館から M. I. に発展したものもある。Economic Library (Kendal, 1797 → M. I. 1825), Tradesmen's Library (Dunfermline, 1808 → M. I. 1832), etc.
- 14) Harrison, *op. cit.*, p. 44.
- 15) 大きな M. I. では相互教育方式の学習方法を取り入れ、いくつもの相互教育協会を内に設ける場合もあった。
- 16) 安川悦子。『イギリス産業革命の労働者——『メカニクス・マガジン』の分析』、『福島大学経済学会商学論集』, vol. 34, 1965, p. 59. また Harrison, *op. cit.*, p. 6-7. をも参照。
- 17) *Ibid.*, p. 54-92.
- 18) アシュトンには、紡績、織布、鋳山業では産業革命によって熟練が不用となったが、土木事業、機械工業、鉄・化学製品・陶器の製造業では古い熟練に代って新技術を身につけた高度の熟練工を養成する必要が起こったとして次の例をあげている。坑夫 → トンネル工、土工；水車大工 → 組立工、旋盤工、鋳型製造工；時計師 → 織物機械工、修理工；精錬工、鍛鉄工 → 鍛鉄工、圧延工；陶業における芸術家の才能。その他大工場の外でも、煉瓦職人、石屋、大工、紡錘製造工、鋸製造工などの熟練が必要だった。しかもこうした産業の生産組織は木綿工場よりはるかにルーズで、下請制度や徒弟制度といった職人的組織がまだ残っていた。Ashton, T. S. 産業革命。[*The industrial Revolution 1760-1830*] 中川敬一郎訳。東京、岩波書店、1973, p. 137-8 より要約。
- 19) ところで、フランスの産業デザインが英国に比して卓越していることが認識されると、M. I. は機械技術のみならず美術教育施設としても重要視された。ユアートによって1835年設置された美術・産業特別委員会は、M. I. の美術教育を評価し、フランスにならって国家が美術教育事業に着手するよう勧告し、1836年ロンドン・デザイン師範学校が設立され、のち、地方の美術(デザイン)学校に補助金が支給されるようになった。
- 20) House of Commons. *Report from the Select Committee on Arts and their Connexion with Manufactures; with minutes of evidence, appendix and index*. 1835, 1836. Irish University Press, Industrial Revolution—Design 1. 1968. (以下 1835 Report と略記する)。
- 21) ロンドン M. I. の vice-president, トブリス (Toplis, C.) は、グラマースクールの古典的学問を論難し、科学など労働者に役立つ実用知識を教える学校がないために M. I. 運動が起こったと述べている。1835 Report, Q. 1553-4.
- 22) 倉内史郎。 *op. cit.*, p. 59.
- 23) 1849 Report, Q. 2496.
- 24) Hammond, *op. cit.*, p. 330.
- 25) Brougham, *op. cit.*, p. 117.
- 26) トブリスは、1835年当時ロンドン M. I. の会員の $\frac{1}{3}$ が職工であり、書記が多数加わっていると述べている。1835 Report, Q. 1557.
- 27) 初期の会員の統計は得られないが雑多になった時のものについて次に詳しい統計がある。ロンドン M. I. (1835) については Kelly, *Birkbeck, op. cit.*, 132-4; マンチェスター M. I. (1831), ハダスフィールド M. I. (1847) については Tylecote, *op. cit.*, p. 296-7, 307.
- 28) Harrison, *op. cit.*, p. 64-5.
- 29) Tylecote, *op. cit.*, p. 27.
- 30) Webb, R. K. *The British Working class reader 1790-1848; literacy and social tension*. New York, A. M. Kelley, 1971, p. 63.
- 31) 急進派については、有用知識普及協会 (Society for Diffusion of Useful knowledge) を創立し、『実際の観察』を著して M. I. の普及に貢献したブルーアム、ロンドン M. I. 創立時に寄付金を提供した、J・ミル、リカード、ヒューム (J. Hume), プレイス、ベンサム、グロート (G. Grote), ホブハウス (J. C. Hobhouse), バーデット (Sir F. Burdett), マンチェスター M. I. のヘイウッド (Sir. B. Heywood) などをあげれば十分であろう。ちなみにユアートは 1839年ロンドン M. I. の vice-president

の1人に選ばれている。ただし、ハスキソン、ビールなどトリー進歩派やロバートソン、ホジキン、オーエン、コベットなど労働運動指導者も初期には加わっていた。

- 30) 急進派は19世紀初頭から議会において初等公教育、グラマースクール・大学の改革、美術学校設立など多方面に渡って教育運動を繰りひろげていた。議会外でもランカスターの始めた助教法学校を支援した。M. I. 運動もこの一環であった。
- 31) *Hansard's Parliamentary Debates*. 3d. series. Vol. 57, c. 114-134.
- 32) *Ibid.*, c. 116.
- 33) *Ibid.*, c. 124.
- 34) *Ibid.*, c. 128.

ジロンはこの時、政府の賛同が得られたので動議をとりあげたが、その後、政府は何ら対策をとらなかった。Hammond, *op. cit.*, p. 333. を参照。

- 35) *Ibid.*, c. 127-8.
 - 36) Brougham, *op. cit.*, p. 122-3.
 - 37) Baker, *op. cit.*, p. 248.
 - 38) Webb, *op. cit.*, p. 84.
- しかしこうした意図は出版活動も含めて失敗に終わった。①大多数の労働者は経済学が高度すぎて理解できなかった。②理解できる少数の職工たちにとって、その教義は疑わしく思われた。③下層中産階級は経済生活の分析より、洗練されたものを欲した。④労働者の政治感覚は理性より経験に基づいていた。

Harrison, *op. cit.*, p. 83-4; Webb, *op. cit.* p. 160.

- 39) 1835 Report, Q. 742 (Foggo, G.)
 - 40) Harrison, *op. cit.*, p. 83.
 - 41) 1849 Report, Q. 1367 (Dawson)
- “チャーティズムの主力をなすものは、マニユファクチャー生産様式から近代工場制生産様式への急激な変移の中にもっとも痛切に自己の社会的地位の危機を体得した下層中産ないし上層熟練労働者階級だったのである。その中でも特に教育活動の中心は、親方手工業者の一部、小店主および古い都市における熟練労働者階級からなっていたロンドン労働者協会のグループから生まれた。”

山田順一。『英国における民衆教育運動発生 の社会史的一考察』、**社会教育**, vol. 11, no. 5, 1956, p. 90.

- 42) “チャーティスト運動における強い教育的傾向のいくらかは二つの原因によっている。それは M. I. における労働者の失望であり、有用知識普及協会に対する不信である。” Hodgen, M. T. *Workers' education in England and the United States*, 1925, p. 17. (山田, *op. cit.*, p. 90 より再引用)
- また、不況の時、M. I. の活動は衰え、労働運動は盛んになり、好況の時はこの逆になった。Kelly, *Birkbek*, p. 208.
- 43) 1837年、ペイカーは大きな M. I. の図書館では政

治・経済学の書物が多数みられ、少数の M. I. で新聞が受入れられていると述べている。Baker, *op. cit.*, p. 247-8.

- 44) 1849 Report, Q. 1228-9, 1326.
- 45) *Ibid.*, Q. 1220, 2449-55.
- 46) *Ibid.*, Q. 1216, 2494.
- 47) *Ibid.*, Q. 1957.
- 48) *Ibid.*, Q. 2424.
- 49) *Ibid.*, Q. 1242.
- 50) *Ibid.*, Q. 1212.
- 51) *Ibid.*, Q. 1996.
- 52) 財政難は終始 M. I. の最大の問題であった。優れた講師を雇えず、教育方法に支障をきたし、会員の減少は大きくなった。一つの解決策としてコンサートや展覧会を開いて収入を得ようとしたが、カジノやダンスホール、コーヒー・ハウスなどと対抗しなければならなかった。もう一つは M. I. の連盟をつくることであった。York-shire Union of Mechanics' Institutes (1837), Metropolitan Association of Institutions (1839) など次々に各地で結成されたがヨークシャー連盟の巡回図書館が成功しただけであった。Hudson, *op. cit.*, p. 175-88. 参照。

三つ目は政府の助成金を得ることであった。ブルーラムは1842年、下院で M. I. の所得税免除を求めて容れられなかったが、翌年ウッド (G. W. Wood) は、“科学および文学の目的のためにのみ使われている建物について、文学・科学協会 (M. I. を含む) から教区税、市税、国税の支払を免除する法案”を提出して成立をみた。(Statutes at Large, 6° and 7° Victoriae, Cap. 36, 1843). しかし、この法律はあくまで間接的援助にすぎず、M. I. の財政難は救えなかった。ジロンの提案は先にみたように失敗していた。

Hansard, vol. 61, col. 1026; vol. 69, col. 920-1; vol. 70, col. 1380. Munford, *op. cit.*, p. 48.

- 53) 1849 Report, Q. 200-8.
- 54) *Ibid.*, Q. 2425.
- 55) *Ibid.*, Q. 1224-6, 2495.
- 56) *Ibid.* Q. 1200, 1217, 1960-1.
- 57) チェサム図書館員 Thomas Jones は、通俗小説は M. I. にとって有益でないし、あらゆる種類の通俗小説は内容が良くないと批判している。*Ibid.*, Q. 1200-3. しかしまた、知的な読書も増えつつあること、特にドーソンのような優れた講師の議義があった場合、急に哲学書の要求が増えたりする例もあるといった証言もみられる。*Ibid.*, Q. 2428-31, 2721, 2821.
- 58) 初等学校国庫補助金交付 (1833—), 10 時間労働法 (1847), 初等教育法 (1870) など.
- 59) M. I. の図書館機能は公共図書館に、科学教育的機能はテクニカル・カレッジに、初等・中等教育機能 (会員の子弟のために週日学校を付設した M. I.

もあった)は初等学校、グラマー・スクールなどに、美術教育機能は美術(デザイン)学校に、博物館的機能は公立博物館に、娯楽・社交的機能はソーシャルクラブ(ただしこれは公立ではない)に受けつがれた。

- 60) Greenwood, *op. cit.*, p. 493.
他の例については, Kelly, *Birkbeck*, p. 275, Kelly. *A History of public libraries, op. cit.*, p. 62, 66-7, 74; Edmondson, *op. cit.*, p. 144-5. : : .
- 61) Munford, *op. cit.*, p. 45-7; Lea, *op. cit.*, p. 11.
- 62) Lea, *op. cit.* p. 11.
- 63) Hansard, vol. 109, col. 848.
- 64) Greenwood, *op. cit.* p. 32. また p. 485-93. も参照.

65) *Ibid.*, p. 488-90.

45) *Ibid.*, p. 488-90.

この巡回図書館は、何冊かの本をセットにしたものを一定地域内の農村地帯の小さな M. I. や協会、あるいは村のセンターに少額の会費で定期的に巡回させるもので、遠隔地に定期的に新しい本が行き渡るという利点をもっている。

- 66) Murison, W. J. *The Public library; its origins, purpose and significance*. 2d. ed. London, Harrap, 1971. p. 41-3.
- 67) Kelly. *A History of public libraries, op. cit.*, 参照.
- 68) Lea, *op. cit.*, p. 12-13.